

# 斎宮女御の歌二首 — 斎宮女御の古画にそえて —

高城 弘一 (竹苞)

Koichi (Chikuko) Takashiro

まずは、拙作の題材であるが、この歌は、『斎宮女御集』所収の女御詠歌二首である。『斎宮女御集』を書写内容とする東京国立博物館蔵「小島切」が、まさにこの二首分プラスαの本文を伝え、その歌句を用いた。実は、勅撰和歌集『拾遺和歌集』には、四五・四五二と連続してこれらが採られている。二首目の「おとにきみたる」は、流布本『拾遺和歌集』では、「おとにみたる」となっており、まさに歌句に異同がみられる。

『大東書道研究』第二十号（大東文化大学書道研究所、平成二十五年三月）において、「坂上是則の歌三首」を発表した。この数年、そのように歌仙絵古画とその詠歌を組み合わせて、一つの作品として仕上げるという創作活動をよく行っている。今般も、描き込みのよい斎宮女御の歌仙絵古画を落手したので、この形式とした。

次に、用具用材等について記述したい。料紙は、新宿書道センターで購求した雁皮紙染紙（五色セット）を使用した。在庫品につき、

かなり枯れているものと思われる。古画に似つかわしいよう、洪めの色を選択した。筆は、広島県熊野市・神技堂製「みかさ」（和狸毛面相）で、墨は、未詳の古めの油煙墨である。落款印「竹」は、本学中国学科卒業・鳥山駿太郎氏刻によるものである。

最終的な表具は、町田市・大澤春峰堂に一任した。「歌仙絵古画が前半」「書が後半」「額装」という三条件のみ掲げたが、それぞれの持ち味を引き出し、一体化した作品に仕上げていただいた。

今般、制作するに当たって、古筆の持つ上品さを意識しつつ、墨量の少ない渴筆部、墨量の多い潤筆部による疎密や明暗を作ることにより、ところどころの余白を際立たせた。



額寸法 34.5×59.3cm  
 作品寸法 18.4×17.0cm

【釈文】(右傍らは字母 / は改行)

爾 可

會

ことのねに峰の松かぜ／かよふらし／いづれのをより／しらべそめ  
 介無 可 爾支三多 日希八 能日  
 けむ／松かぜの音にきみたる／ことのねをひけば／ねのひのこゝち

所 連

こそ／すれ